

成河 × 演出 藤田俊太郎

セルヒオ・ブランコ作『ナルキッソスの怒り』

成河、舞台一人で挑むオートフィクションミステリー

2026年4月東京芸術劇場シアターウエストにて日本初上演決定！



▲成河



▲藤田俊太郎

リアルと虚構が交錯するオートフィクションで描かれる、セルヒオ・ブランコ作、仮屋浩子翻訳で出版されている『ナルキッソスの怒り』の**日本での初上演**が決定した。2015年にモンテビデオでセルヒオ自身の出演により初演して以降、南米をはじめ世界各国で上演され、2020年のロンドン公演は、「オフ・ウエスト・エンド・シアター・アワード」の2021年度最優秀新作賞を受賞した本作。**2026年4月、東京芸術劇場シアターウエスト**にて日本初上演となる。

出演はミュージカルからストレートプレイまで、その確かな演技力で劇場空間を魅了する**成河**がひとり芝居で挑む。

物語はセルヒオ自身が滞在したスロベニアの首都リュブリャナのホテルでの体験を基に描かれる。冒頭、成河はセルヒオとの交流を観客に語り始める。そして展開される、ホテルでの奇妙な出来事。そこにいるのは、成河かセルヒオか…緻密で怪奇な世界に観客を誘う。

演出するのは、**藤田俊太郎**。常に言葉と対話を大事にしている藤田が成河とタッグを組み、**オートフィクションミステリー**の世界を描く。

『ナルキッソスの怒り』は、**2026年4月18日（土）～4月30日（木）**、東京・東京芸術劇場シアターウエストにて上演。
チケットの詳細、その他情報は随時公開します。ぜひ、ご注目ください。

<成河 コメント全文>

初めて戯曲を読んだ時は真剣に断ろうと思ったくらい「上演」そのものが困難に思えた作品でした。この作品が持つ「オートフィクション」という表現様式、それを日本の演劇として形にして行く作業は並大抵ではないと感じました。幸いひとり芝居ということで翻訳に深く関わらせていただける、その事に背中を押され、僅かな光と無謀な好奇心だけを頼りに引き受けました。半年ほど演出の藤田さんや翻訳の仮屋さんたちと作業を続けてきて、いま、足を踏み入れたことの無い危険な場所を彷徨うような感覚に震えています。これは得難い演劇体験になるだろうと今からワクワクしています。ぜひネタバレ厳禁で。皆さまにもこの新しい感覚を楽しんでいただけたらと思います。

<藤田俊太郎 コメント全文>

『ナルキッソスの怒り』。この戯曲に初めて触れた時から、オートフィクションという新しい演劇の可能性に魅了され続けています。舞台は現代、壮年の大学教授が学会のために訪れたスロベニアで事件は起こります。美しい青年との出会いを通し、彼が見て聴いたものは現実なのか幻なのか。自分、とは何者なのか。劇はギリシャ神話をモチーフにしながら、現代社会、環境、格差、人間の在り方など多くの疑問を投げかけます。ユーモアを交えて、時に有名な映画や音楽のシーンを織り込み、また官能的に進んでいきます。成河さん、作者であるセルヒオ・ブランコさん、翻訳の仮屋浩子さん、北隆館の関係者の皆様、プロデューサーの皆様と時間をかけて上演台本を創りました。その過程そのものが劇的であり、作品の中に反映されています。成河さんの言葉、身体、歌、芝居には美しさと輝きが宿り、2026年の世界を写し出す鏡になると思います。この鏡は頑丈なのか、それとも血だらけなのか、はたまた粉々に砕けているのか。お客様は自分自身の現在の姿を覗き込んでいただけたらと思います。虚実を織り交ぜながらお届けする舞台を堪能し、体験していただけたら。日本初演の演出を担えることに誇りを持って、皆様のお越しを劇場でお待ちしております。

<あらすじ>

劇作家であり、大学で教鞭も取るセルヒオ。彼は学会に出席するため、スロベニアの首都リュブリャナを訪れる。そこで、イゴールという美しい青年と知り合い、彼との情事に溺れていく。そして滞在するホテルの部屋、228号室で発見したのは部屋のあちこちに点在する数々の、染み。この2つの事象が、セルヒオを戦慄の真実へと導いてゆく…！

▼作：セルヒオ・ブランコ

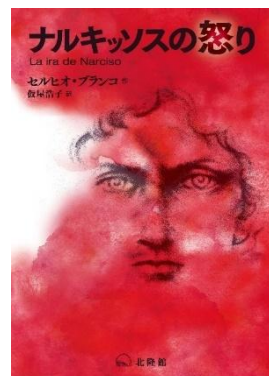
モンテビデオ（ウルグアイ）出身、大学では文献学と演劇学を専攻。現在はパリ在住の劇作家・演出家。オートフィクションを軸に、作者、登場人物、俳優が交わる地点を探る作品を創作している。国民演劇賞（ウルグアイ）、フロレンシオ最優秀劇作家賞、カサ・デ・ラス・アメリカス戯曲部門特別賞（キューバ）、最優秀戯曲賞（ギリシャ）、オフ・ウエスト・エンド新作賞などを受賞。戯曲は15カ国語以上に翻訳され、20カ国以上で上演されている。日本では『ナルキッソスの怒り』、『テバースランド』が翻訳出版され、『テバースランド』は2022年神奈川芸術劇場（KAAT）で初上演、2025年『カサンドラ』が千本桜ホールで上演された。その他の代表作に『デュッセルドルフの唸り』、『私の墓を君がまたぐ時』、『Tráfico』、『動物園』、『告白』、『大地』がある。

▼『ナルキッソスの怒り』／北隆館刊行

『テバースランド』（2019年北隆館刊行）に続く仮屋浩子翻訳の第2作。

本作で語られるギリシャ神話に出てくるナルキッソスとその眼差しについての、著者セルヒオ独自の詩学。「ナルキッソスの眼差しとは、自分自身への眼差しでありながら、他者を探求するものである」。自分とは他者の眼差しを通して存在する。自分を見つめる時に、他者からの問いかけが常にある。自分自身への探求を通して、他者との関りをもつ。つまり、新たな他者に出会うのだ。そして、本作は著者セルヒオ・ブランコが織りなす、リアルと虚構が交差する世界（オートフィクション）を、最後の頁までスリリングに堪能するものとなっている。一度読みだしたら、その緻密で怪奇な世界に酔わされてしまうー（編集部より）

©2022 北隆館



<『ナルキッソスの怒り』 概要>

【タイトル】『ナルキッソスの怒り』

【作】セルヒオ・ブランコ

【翻訳】仮屋浩子（『ナルキッソスの怒り』北隆館刊）

【上演台本】仮屋浩子、成河、藤田俊太郎

【演出】藤田俊太郎

【出演】成河

【開催日程・会場】2026年4月18日（土）～ 4月30日（木） 東京・東京芸術劇場シアターウエスト

【主催・製作】エイバックス・ライブ・クリエイティヴ／シーエイティブロデュース

【企画】シーエイティブロデュース

【お問合せ】チケットスペース 03-3234-9999（10:00～15:00※休業日を除く）

●公式HP：<https://narcissus-stage.com/>

●公式X：@narcissus_jp

<プロフィール>



成河（そんは）

東京都出身。大学時代から演劇を始め、北区つかこうへい劇団などを経て舞台を中心に活動。08年文化庁芸術祭演劇部門新人賞、22年に紀伊國屋演劇賞個人賞、11年と25年読売演劇大賞優秀男優賞を受賞。近年の主な出演作に、舞台：『髑髏城の七人』Season 花、『エリザベート』、『子午線の祀り』、『スリル・ミー』、『タージマハルの衛兵』、一人芝居『フリー・コミティッド』、『建築家とアッシリア皇帝』、『ラビット・ホール』、『ある馬の物語』、『ねじまき鳥クロニクル』、『未来少年コナン』、『ピロマン』、一人芝居『ライオン』、『イルユー・ジョニスト』、『W3 ワンダースリー』、『チ。一地球の運動について』など。映像では、大河ドラマ『鎌倉殿の13人』、映画吹替えに実写版『美女と野獣』、『ミッキー17』など。26年2～3月にはKAATカナガワ・ツアー・シリーズ『冒険者たち』『帰ってきた冒険者たち』の出演が控えている。



演出・藤田俊太郎（ふじた しゅんたろう）

1980年生まれ、秋田県出身。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。演出作に『The Beautiful Game』『美女音楽劇人魚姫』『手紙』『ジャージー・ボーイズ』『sound theaterVI,VII,2023,2025』『Take Me Out』『ダニーと紺碧の海』『ジャージー・ボーイズ イン コンサート』『ピーターパン』『LOVE LETTERS』『VIOLET』（英国版/日本版）『絢爛豪華 祝祭音楽劇『天保十二年のシェイクスピア』』『NINE』『東京ゴッドファーザーズ』『ミネオラ・ツインズ』『ラビット・ホール』『ヴィクトリア』『ラグタイム』『東京ローズ』『リア王の悲劇』。読売演劇大賞第22回優秀演出家賞・杉村春子賞/第24回最優秀作品賞・優秀演出家賞/第28回優秀作品賞・最優秀演出家賞/31回大賞・優秀作品賞・最優秀演出家賞、第42回菊田一夫演劇賞、第42回松尾芸能賞優秀賞、第75回芸術選奨演劇部門 文部科学大臣新人賞受賞。あきた芸術劇場ミルバスアドバイザー。26年1月にはミュージカル『ISS A in Paris』の開幕が控えている。